



Title	ゴート語によるヨハネ福音書注解
Author(s)	高橋, 輝和
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1975, 16, p.119-127
Issue Date	1975
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/9651">http://hdl.handle.net/10069/9651</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T10:24:39Z

# ゴート語によるヨハネ福音書注解

高 橋 輝 和

## Skeireins aiwaggeljons thairh Iohannen

TERUKAZU TAKAHAŠI

最初の本格的な研究者である H.F.Maßmann<sup>(1)</sup> によってゴート語で Skeireins aiwaggeljons thairh Iohannen 「ヨハネによる福音書の注解」と命名されたゴート語文書は、本来 224葉 448ページ程と考えられる大部の羊皮紙写本の内の 8葉16ページの断片であって、この内の 5葉はミラノのアンプロシアーナ図書館に、他の 3葉はローマのヴァティカン図書館に所蔵されている。これらの 8葉には、その中で主題として引用されているヨハネ福音書の章節の順序に従って、次のように番号が付けられている：

- 第 1 葉 (ミラノ) : ヨハネ 1.29
- 第 2 葉 (ミラノ) : ヨハネ 3.3,4,5
- 第 3 葉 (ローマ) : ヨハネ 3.23,24,25
- 第 4 葉 (ローマ) : ヨハネ 3.29,30,26,31,32
- 第 5 葉 (ミラノ) : ヨハネ 5.21,22,23
- 第 6 葉 (ミラノ) : ヨハネ 5.35,36,37,38
- 第 7 葉 (ミラノ) : ヨハネ 6.9,10,11,12,13
- 第 8 葉 (ローマ) : ヨハネ 7.44,45,46,47,48,49,50,51,52

従ってもともとヨハネ福音書の凡ての章節が引用されて説明されていたと考えるならば、現存する 8葉における引用文と説明文との割合から計算して、第 1葉以前に約 14葉、第 1葉と第 2葉との間に 18葉、第 2葉と第 3葉との間に 6葉、第 3葉と第 4葉との間に 1葉、第 4葉と第 5葉との間に 23葉、第 5葉と第 6葉との間に 2葉、第 6葉と第 7葉との間に 3葉、第 7葉と第 8葉との間に 17葉、第 8葉以降に 132葉程が欠落していると考えられている<sup>(2)</sup>。

現存する各葉は、第 6葉を除いて、凡てラテン語が重ね書きされているため、また汚損のため、以前は部分的に著しく判読が困難とされて、推測読みや、かなり勝手な校訂が多くなされていたが、第 2次大戦後に W.H.Benett が赤外線や紫外線による特殊撮影を行って解読した結果、従来の多くの問題箇所が明白になった。後に掲げる私訳は Benett の解読に依っているのであって、W.Streitberg 等の以前の校訂本は凡て大巾に改訂される必要がある。

この注解書自体は、まず一人の達筆なゴート人によって書き記されたが、かなり多くの小さな間違いがあったため、拙筆の別人によってていねいに訂正されている。しかしそれでもなお若干の文法的な誤りが残っている。

用いられている言葉は聖書訳のゴート語と——文体以外は——本質的に異なるところはなく、6世紀頃にイタリアで書かれたと考えられている（聖書訳は360年頃に西ゴート人のウルフィラによってなされたが、現存する聖書訳写本は凡て東ゴート人によってイタリアで6世紀に作られたと考えられている）。

このゴート語によるヨハネ福音書注解は宗教史的、神学史的にも興味があるものであるが、これがそもそもゴート人の手になる創作か、それとも翻訳かと言う問題は、発見以来種々論じられたが、今日では、まず初めにギリシャ語から翻訳されて、後に書き伝えられる過程でラテン語からも文体上の影響を受けたと言う見解が有力である<sup>3)</sup>。ただし原典と目されるものや、類似の文書は発見されていない。

以下の訳文において、原文中でも引用符が付けられている個所には引用符を付けた。ただし原文には引用個所名の表示はない。丸かっこの部分は訳者の追加である。

## 第1葉

「悟る、または神を求める人はいない。凡ての人々がはずれ出て、共に役に立たなくなった。」<sup>4)</sup>そして既に死の裁きの下に落ちた。それ故に凡ての人々の共通の救済者が、凡ての人々の罪を払い清めるために、やってきた。彼は我々の義と同一でもなく、同様でもなくて<sup>5)</sup>、自らが義なのであって、我々のために自らを「神への捧げ物かつ供え物として」<sup>6)</sup>犠牲にしてこの世の救済を行うために（やって来たのである）。そこでこれを、主によって将来成就される計画をヨハネは見て、本当に、「見よ、彼はこの世の罪を取り除く、神の小羊である」<sup>7)</sup>と言った。確かに彼は人の肉体がなくても、神的な権威だけでもって、凡ての人々を悪魔の暴虐から救い出すことができたであろう。だが彼は、そのような権威でもって彼の力の威圧は示されるが、もはや義の計画が保持されずに、威圧をもって人々の救助を行う結果になるということを知っていた。と言うのは、もし悪魔が初めから人を強いたのではなくて、誘惑したのであり、そして嘘によって（人が）命令に背くよう唆かしたのであれば、もし主が神的な力をもってやって来て、そして権威でもって人を解放し、また威圧でもって（人を）信心に向けたとすると、まさしくこれはふさわしいことに反していたであろう。と言うのは彼は、義の強制下では、前もって既に初めから決められていた計画に背くように思われなかったであろうか。そこでずっとふさわしかったのは、自分の意志でもって悪魔に従い、神の命令に背くことになってしまった人々が再び自らの意志で救済者の教えに同意的になることであり、そして以前彼らを誘惑した者の悪意を軽蔑することであった。それで神における生活の再開始のために真理の知識を立てるため、まさしくこのこと故に彼は、我々にとり神に依った義の師となるようにと、人の肉体をも得たのである。と言うのは彼は、彼の知性に似つかわしくあるために、言葉と行為とでも

って人々を再び招き寄せたり、また生活の福音の告知者になるべきであったからである。しかし律法の強制はただ回心だけではなく……なので……

## 第2葉

彼（ニコデモ）は信仰の点で……になりつつ、今やもう彼（キリスト）のために大胆である。つまり彼は受難の時には彼の体を受難後公然とヨセフといっしょに埋め、上役達の脅迫に身を翻しはしなかったと公言するのである。そしてそれ故に救済者はその時もう（教えを）始めながら、上に、神の王国に（人を）運ぶ道を示して言った。「まことに、まことに私はあなたに言う。もし上から生まれない人は、神の王国を見ることができない。」<sup>98</sup> 上からとは、その時、神聖にしてかつ天からの誕生、水洗によって第二の誕生を受けることを言ったのである。このことをその時ニコデモは理解しなかった。その時に初めて師から聞いたこのことのため、まさしくこのこと故に彼は言った。「どのようにして年取ったまま人が生まれることができるのか。その母の胎内へ再び入って行って、そして生まれることができるのか。」<sup>99</sup> と言うのは、まさしく彼はまだ無知であり、かつ（そのような）習慣を知らなかったからであり、そして胎内からの肉体的な誕生を考えていたので、疑問に陥ったのである。それ故に彼は言った。「どのようにして人が年取ったまま生まれることができるのか。その母の胎内へ再び入って行って、そして生まれることができるのか。」しかし救済者は彼の将来の判断とそして彼が信仰の点で栄えるであろうと言うことを見て取って、その時無知の人のような彼に説明して言った。「まことに、まことに私はあなたに言う。もし水と霊との中から生まれない人は神の王国に入っていくことができない。」<sup>100</sup> と言うのは、これが必要不可欠のことであったからである。そして（人の）本性から言ってふさわしかったのは、洗礼の計画を受け入れることであった。つまり人は種々の本性から成り立っていて、つまり心と体とから、そしてこれらの一方は目に見えるが、しかし他方は霊的である。そのために彼は適切にこれらの事柄に従って、そして二つのものを挙げたのである。洗礼の計画に依って両方に属するもの、つまり目に見える水と心で考えられる霊とを、つまり目で見られる……を……（する）ために……

## 第3葉

「そこに（沢山の水が）あった。そしてそこへ彼らはやって来て洗礼を受けた。まだヨハネは牢に入れられていなかったのである。」<sup>101</sup> このことをその時福音伝道者は言いながら、彼のもとでの計画がヘロデの陰謀によって終りに近づいていたことを示した。しかしこの前に、二人が洗礼をしていた時、そして二人の各々がその洗礼を勤めていた時に、ある人達は、二人のどちらがより偉大であるべく定められているのか知らずに、互いに議論をした。「それからヨハネの弟子達の中からユダヤ人達と純化について論争が生じた。」<sup>102</sup> 今やもう体の浄化の慣習は変えられていたし、また神のもとでの清浄が命じられていたので、もはや彼らはユダヤ的な灌水や日々の沐浴をする努力をするべきではなく、福音の先駆者ヨハネに聞き入るべきであった。

そしてその時主も霊的な洗礼を勤めていた。それ故に純化についての論争が正当に提起されたのである。と言うのは律法は故意ではない人々の悪行の一つ（の浄化）<sup>113</sup>を規定していたからである。宿营地の外で焼かれた雌小牛の灰、これをその後清らかな水の中に投げ入れ、そしてヒソプと赤い羊毛とを上からまき散らすのである<sup>114</sup>。熟慮する人々の考えを超越した人達にふさわしかったように。しかしヨハネは贖罪の洗礼を告げたのである。そして悪行の許しを無邪気に回心する人々に約束した。しかしまた主による罪の許しの際には聖霊の授与をも（約束した）。そして彼らが（神の）王国の息子になるであろうと彼らに認めてやった。従ってヨハネの洗礼は二つの中間にあることになる。つまり律法の浄化には勝るが、しかし福音の洗礼よりははるかに小さい。それ故に彼ははっきり我々に教えて言っている。「私は水の中であなた達を洗礼しているが、しかし私の後に来つつある人は私より強くて、私は身をかがめて、その人のほき物のひもをほどくに値しない。まさにその人がその時あなた達を聖霊の中で洗礼する。」<sup>115</sup>この計画について今や……

#### 第4葉

「この私の喜びは今や満たされた。あの人は大きく、しかし私は小さくならなければならない。」<sup>116</sup>それ故に今や彼の弟子達は純化についてユダヤ人達に論争をしかけ、そして彼に<sup>117</sup>言った。「師よ、あなたといっしょにヨルダン川の向うにいて、あなたが証した人が、見なさい、彼が洗礼している。そして凡ての人々が彼の所へ行く。」<sup>118</sup>彼らはまだ救済者に関する事を知らなかったのである。それ故に彼は彼らに教えて言う。「あの人は大きく、しかし私は小さくならなければならない。」だがしかし彼のもとでの計画はつまりしばらくの間役に立ち、そして洗礼を受ける人々の心を準備して、（それを）福音の告知に任せたのである。しかし主の教えはユダヤから始まり、また全世界にまで、皆に広がり、今日まで栄えていて、そして増大し、凡ての人々を神の知識へと引き寄せている。それ故にまた実に主の栄光の偉大さは明らかであるので、彼は知らせて言った。「上から来る人は凡ての人々の上に存在する。」<sup>119</sup>彼が理由なく、上に存在する人を知らせたと言うのではなく、彼の偉大さの力がまたそれ程大きいことを表示し、そして（彼が）天からの人にして、上から来た人であると言ったのである。しかし自分自身は地からの人にして、地から語る人と（呼んだ）。彼は本性から言って人間であったが故に、例え彼が神聖または予言者であったにせよ、そして義を証したにせよ、しかし彼は地からの人であり、そして本性的な（自然の）論理<sup>120</sup>をもって語ったのである。「だが天から来た人は」、例え肉体の中に存在するように思えたにせよ、しかし「凡ての人々の上に存在する。そして見たり聞いたりしたことを証する。そして彼の証しをだれ一人受け入れない。」<sup>121</sup>そして例え天から地へ、人々の（ための）計画故に来たとしても、しかしそれにもかかわらず決して彼は地的でもなく、地から語るのでもなく、彼が父の所で見たり、聞いたりした天の秘密を伝えるのである。これらのことが今やヨハネによって表示されたが、ただ単に主の大きさを知らせるためではなく、大胆にも父と息子とが一つであると言っているサベリウス<sup>122</sup>やマル

ケルス<sup>23</sup>の不信心な論戦をとがめ、かつ非難するためであった。しかし他のある司祭は……

### 第5葉

父に対する敬意の…… 彼はいかなる行為の際にも唯一の命令を待つ。つまりこの一方が愛する者、だがこの他方は愛される者、一方が指示する者、だが他方は前者の行為をまねる者であると言うことを、まさしくこのことを、その時彼は将来の人々の邪説を知っていて、彼らがこのことから父と息子との二つの位格を信奉することを学び、さらに同意するように表示したのである。そしてこれに従い明白な言葉を用いて、「と言うのは父が死人達を起こして生かすように、息子もまた望む人達を生かす」<sup>24</sup>と言った。彼は自らの意志と自らの力とをもって、先に死人達を生かえらせた方をまねると約束し、不信心な人々の闘争欲をしかって非難した。「父はだれ一人として裁かず、凡ての裁きを息子に委ねたのである。」<sup>25</sup> ところでもしサベリウスの説明に従って、異なった名前でもって示されてはいたが、(父と息子とが)同一者であったとすると、いかにして同じ方が裁くことができたり、またできなかつたりしたのであろうかと言うのは単に名前の変化が二つの位格の違いを示すだけではなくて、むしろ行為の特徴がつまり一方をだれ一人裁かず、裁きの権威を息子に委ねる者として(示すのである)。そして彼は父から敬意を受け、そして「凡ての人々が父を敬うのと同じように息子を敬うため」<sup>26</sup> 凡ての裁きを彼の意志に従って行うのである。そこで凡て我々は、このような種類の、かつこのように明白な説明の際には、不出生の神に敬意を捧げ、そして一人子として生まれた神の息子には神であることを認めなければならない。それ故に信じる我々はやはり両者の各々に対し(両者の)能力に応じて敬意を払いたいと思う。と言うのは「凡ての人々が父を敬うのと同じように息子を敬うため」と言われていることが、同一ではなくて、同様の<sup>27</sup> 敬意を払うことを我々に教えているからである。そして救済者自身も弟子達のために父に祈って、「あなたが私を愛しているのと同じように、あなたは彼らを愛している」<sup>28</sup>と言った。彼は同一ではなくて、同様の愛をこのことによって示しているのである。まさしく同じ方法でもって……

### 第6葉

……つつその者(サベリウス)の説明は、彼(ヨハネ)自身が「あの人は大きく、しかし私は小さくならなければならない」<sup>29</sup>と言っているように、強いられてさらに(人々に)知られなくなった。それ故にこそしばらくの間彼らは信じ、ヨハネに耳を傾けているように思えた。しかし後にすぐ彼らは彼に関することを忘却に委ねてしまった。そこで彼は「あの人は焼えて輝く明かりであった。そしてあなた達はしばしば彼の光の中で歓喜しようと欲した。しかし私はあのヨハネよりも大きな証しを持っている。と言うのは、私が行うようにと父が私に委ねた行為、私が行う行為が私について、父が私を遣わしたことを証しするからである」<sup>30</sup>と言って彼らによく思い出させるのである。と言うのは、あの人は人間の言葉で証しして、疑いを招くように思われたからであり、彼は真の人であったが無知の人々に対しては疑いを招く可能性があ

ったからである。しかし私の行為によって父の証しは、ヨハネの人間的な凡ての説明を超越しており<sup>91</sup>。あなた達に疑いの余地のない知識を提供することができる<sup>92</sup>。なぜなら人間から聞き取られたどの言葉も違ったものに変えられ得るからである。しかし神聖な行為は議論されることなく、行為者の判断を明きらかにし、はっきりと彼が父によって天から遣わされたことを示す。それ故に彼は「そして私を遣わした父、まさしく彼が私について証しする」<sup>93</sup>と言うのである。だがしかし彼についての父の証し立ては種々であり<sup>94</sup>、かつ種々の時になされたが——ある時は予言者の言葉により、またある時は天からの声により、またある時はしるしにより——だがこれらのことがこのようになされたが故に、不信心者の心はさらに硬くなったのである。それ故に彼は正しく付け加えて言った。「決してあなた達は彼の声聞きはしなかったし、彼の顔を見もしなかった。また彼の言葉をあなた達の（心の）中に留めておかない。なぜならあの方が遣わした人、まさしくその人をあなた達は信じないからである。」<sup>95</sup>しかし彼は従順な人々に軽蔑されるようになってはいないが故に<sup>96</sup>、（従順な人々の中には）彼の声聞いた人もあり、また彼の顔を見た人もある。と言うのはその時彼は「心の清らかな人々は幸せである」<sup>97</sup>と言ったからである。「なぜなら彼らは神を見るからである。」<sup>98</sup>そしてすぐにそれから担保のように……によって……

## 第7葉

……主の力を知っており、そして彼の権威を覚えている者の……彼(ピリポ)一人ではなくアンドレもそうであって、彼は「大麦のパンを五つと魚を二匹持っている少年が一人ここにいる」<sup>99</sup>と言った。ピリポと同じように彼も（師の）偉大さを全く考えず、また師の産出能力をも覚えておらずに、非難して言った。「しかしこんなに多くの人々に対してこれが何になるのか。」<sup>40</sup>だが主は彼らの幼さを心に掛けて、「この人々を横にならせよ」<sup>41</sup>と言った。「それで彼らは、その場所に乾草が沢山あったので、その多数の人々を横にならせた。」<sup>42</sup>女達と子供達を除いて五千人の男達が大规模な夕食の際のように横になった。それらの五つのパンと二匹の魚以外に何もなかったのであるが、それらを彼は取って、そして感謝し、祝福した。そしてそのように多くの良い食料でもって彼らを満足させた訳であるが、ただ単に欠乏の満足を彼らに与えたのではなくて、ずっと多くのものを（与えたのである）。「その多数の人々が食べた後、残ったパンで一杯の十二のカゴが見つかった。」<sup>43</sup>「それからまた同じように彼らは魚を欲しいだけ取った。」<sup>44</sup>その時彼はそれらのパンだけではなく、それらの魚でもって彼の力の多大さを示したのである。つまり彼はその後それら（魚）を、それら（パン）の残りを集めたのと同じ数量にした<sup>45</sup>。その結果彼は各人に欲しいだけ取らせた。そして彼はその多大さでもって不足を全く生じさせなかった。しかしさらにはそのことによってむしろ弟子達を満足させたのである。そして他の人々には、彼が、砂漠の中で四十年間彼らの祖先達を養った同じ人であることに気づくよう注意した。「そして彼らが満腹になった後、彼は彼の弟子達に、一つとして失なわれないように、残っているくずを集めよと言った。そこで彼らは集め、そして

あの五つの大麦のパンと二匹の魚の、彼らの所に残っていたくずで十二のカゴを一杯にした。<sup>46)</sup>

### 第8葉

「……(だれも)彼に手をかけ(なかつ)た。」<sup>47)</sup>と云うのは彼の神聖な力が目に見えずしてなおも彼らの悪意を打ち砕き、そして(定められた受難の)時以前に(彼らが)彼を<sup>48)</sup>捕えることを許さなかったからである。「それでその役人達は最高司祭達とパリサイ人達の所へ帰って来た。そしてそこで彼らは彼らに言った。なぜお前達は彼を連れて来なかったのか。すると役人達は答えて言った。だれ一人としてかってあの人のように語りはしなかった。」<sup>49)</sup>まさしくこの答えがその時彼らの不信仰故に、非難、それ以上に呪詛に変わった。と云うのは彼らは、彼らが彼を連れて来なかったのも、彼らをとがめているその人々に口答えしたからである。彼らは、彼らをとがめているその人々の悪意を恐れず、それどころか、主の教えに感心して、明きらかに凡ての人々の中で(主の教えが)勝れていると考えたのである。だが彼らは自らの悪意故に彼らの大胆さに我慢がならず、憎しみをもって彼らに対し答えて言った。「お前達も惑わされているのか。いいか、支配者達またはパリサイ人達のだれが彼を信じたことがあるのか。律法を知らない他の多数の人々は呪われているのだ。」<sup>50)</sup>まさしくこれらのことをその時彼らは怒りのにがさをもって話した。支配者達またはパリサイ人達のだれも彼を信じなかったと言う点では彼らは嘘をついていることが分かる。ニコデモは神の計画について彼の所に夜やって来たのであり、そして大胆さをもって、真理に味方して、彼らに「我々の律法が人を裁くのか」<sup>51)</sup>等々<sup>52)</sup>言ったのである。彼らは、「支配者達とパリサイ人達のだれも信じなかった」と言ったのであるが、彼らは、彼(ニコデモ)がつまりパリサイ人であり、そしてユダヤ人達の助言者であり、そして彼は「呪われた人々」の中から支配者の一人として示されていたことを考えずに、議論したのである。彼は主を信じ、彼らの悪意の非難が目的で彼のために語ったが、しかし彼らはその非難に我慢がならず、答えて言った。「お前もガリラアの出身なのか。……と云うことを調べて見よ……」<sup>53)</sup>

### 注 記

- (1) Skeireins aiwaggeljons thairh Iohannen, Auslegung des Evangelii Johannis in gothischer Sprache. München 1834.
- (2) W.H.Benett, The Gothic Commentary on the Gospel of John. New York 1960, S. 6 f.
- (3) Benett 前掲書 S. 41. とりわけ目につく属格の前置や一単位をなす文肢の隔置はラテン語文体と考えられる。
- (4) ローマ3.11,12.
- (5) ibna「同一の」, galeiks「同様の」の意味については注27参照。
- (6) エペソ5.2.
- (7) ヨハネ1.29.



- (8) ヨハネ3.3.ゴート人が「上から」と訳したギリシャ語の *ανωθεν* にはこの意味もあるが、むしろここでは「新たに」と訳されなければならない。
- (9) ヨハネ3.4.
- (10) ヨハネ3.5.
- (11) ヨハネ3.23, 24.
- (12) ヨハネ3.25.
- (13) この所の原文は *missadede ainaizos witoth raidida* となっており、しかも *witoth* には抹消のしるしが付いている。しかしこの語を抹消しただけでは前の属格が中に浮くので、代りに *hrainein* と言ったような言葉を入れなければならないと思う。
- (14) レビ4.12, 民数19.5, 6, ヘブル9.13, 19 参照。ただしこの通りの規定はない。
- (15) この通りの個所は聖書になく、ルカ3.16に最も近いが、マルコ1.7, 8, マタイ3.11, ヨハネ1.26, 27 の各個所が混合されている。
- (16) ヨハネ3.29, 30.
- (17) 原文では再帰代名詞 *sis* が用いられているが、ここでは三人称単数男性人称代名詞 *imma* でなければならない。
- (18) ヨハネ3.26.
- (19) ヨハネ3.31.
- (20) 原文の *us waurdahai wistai* を直訳すれば「論理的な本性から」となるが、これは Benett によれば *Anthimeria* の一種で、形容詞の *waurdahai* が名詞概念を、*us wistai* が形容詞概念を表わしていると言う。
- (21) ヨハネ3.32.
- (22) 北アフリカ出身。260年頃没。神は単一なる実体であって、その顕現様態のいかんによって、父・子・聖霊となると主張し、正統派の三位一体論と争った。
- (23) ガラテアのアンキュラの主教。374年頃没。アリウス主義者らの多神教的な危険を恐れるあまり、単一神的、一神教的立場に偏重し、そのためかえってサベリウス主義的異端者であると攻撃された。日本基督教協議会編「キリスト教大事典」1968年参照。
- (24) ヨハネ5.21.
- (25) ヨハネ5.22.
- (26) ヨハネ5.23.
- (27) 形容詞 *ibna* は「同様の」、*galeiks* は「類似的」と従来訳されていたが、これは、この文書がゴート語であるが故にアリウス主義的であるに違いないと言う先入観に基づいていたからである。*ibna* と *galeiks* の意味を慎重に他の用例から考え、かつここでの前後関係から考えると従来の解釈は不都合である。確かにサベリウス主義に反論している点ではアリウス主義的であるが、しかしまた全く同じ程度に正統派的でもあり得る。そしてもしこの文書が正統派に近い半アリウス主義的であるとしても、やはりそうであるにしては主張に積極性が欠ける。H.G.Richert, *Ni ibnon ak galeika swe-ritha, Überlegungen zum dogmatischen Standpunkt des Skeireinisten. Festschrift für G. Weber, 1967* 参照。
- (28) ヨハネ17.23.
- (29) ヨハネ3.30
- (30) ヨハネ5.35, 36.
- (31) 原文 *alla ufar insaht manniskodaus Iohannes* を直訳すると「ヨハネの人間性の凡ての説明を越えていて」となるが、Benett によれば属格名詞 *manniskodaus* は形容的な機能を持っている。
- (32) この文は直接語法になっているが、引用符も付けられていないし、また実際に聖書中の文句でもない。これが注釈者の説明であるなら「私の」は「彼の」で、「あなた達に」は「彼らに」でなければならない。
- (33) ヨハネ5.37.

- (34) 形容詞 *missaleiks* は男性形になっているが, *weitwodeins* が女性名詞であるので, 女性形 *missaleika* でなければならない.
- (35) ヨハネ5.37, 38.
- (36) 原文 *at thaim gahwairbam frakunnan ni skuld ist* の *skuld* を *skulds* の間違いと考えなければ意味が通じない.
- (37) マタイ5.8.
- (38) マタイ5.8.
- (39) ヨハネ6.9.
- (40) ヨハネ6.9.
- (41) ヨハネ6.10. 古代地中海世界では横になって食事をした. これはゴート人の知らない習慣であったらしく, ゴート語の *ana-kumbjan* 「(食事のために)横になる」はラテン語 *ac-cumbere* の借用である.
- (42) ヨハネ6.10の変形引用.
- (43) ヨハネ6.13, ルカ9.17からの変形引用.
- (44) ヨハネ6.11. 聖書では「彼らが欲しいだけ彼は与えた」であるが, ここでは第二の書者によって *andnemun* 「彼らは取った」が書き加えられている.
- (45) この原文の語順は特に複雑である: *swa filu auk swe gatawida ins thathro las ize wairthan = gatawida auk ins thathro wairthan swa filu swe las ize*
- (46) ヨハネ6.12, 13. 「二匹の魚」は聖書にはない. 聖書中ではパンに重点が置かれているが, この注釈では魚も同じように重視されている. ここではイエス・キリストの象徴(*Ιησους Χριστος θεου Υιος Σωτηρ* 「イエス・キリスト, 神の息子, 救済者」の頭文字を合わせると *ιχθυσ* 「魚」になる)が意識されているに違いない.
- (47) ヨハネ7.44.
- (48) 原文は *sik* 「自分自身を」とあるが, これは *ina* の誤りである. 注17でも指摘したが, ゴート語文書ではしばしば再帰代名詞の用法が誤っている.
- (49) ヨハネ7.45, 46.
- (50) ヨハネ7.47, 48, 49.
- (51) ヨハネ7.51.
- (52) 原文は *ktl jah los* とあり, Benett によれば *ktl* はギリシャ語の *και τα λοιπα* の略であり, *los* はゴート語の *laibos* の略であるとされる.
- (53) ヨハネ7.52.

(昭和50年9月18日受理)